

「コロナ禍」の声を聞く ——大阪大学文学部日本学専攻での教育実践から——

Doing Oral History of Covid-19

安岡 健一・松永 健聖
YASUOKA Kenichi, MATSUNAGA Takemasa

キーワード：コロナ禍，大学生，教育実践

はじめに

本稿は、2020年度に大阪大学文学部における教育の一環として取り組んだ聞き取り実践として、2020年9月に、日本オーラル・ヒストリー学会の研究実践交流会にて報告した内容（「緊急事態」の声を聞く——大阪大学文学部文化交流史演習での実践から）を原稿化するとともに、2021年度の実践について補足したものである。

本稿は安岡健一と松永健聖の両名による分担執筆である。第一章では演習の設計とその意図について安岡健一が執筆し、第二章では演習の聞き取り実践から見えてきたことについて大学院生として受講した松永健聖が執筆し、最後に第三章で2021年度の取組について安岡が執筆した。それぞれが元となる原稿を執筆したのちに、相互に内容を確認した。なお、聞き取りの事例引用の際、作成した報告書では人名を実名で記載しているが、本論文においては聞き手を「聞」と略し、語り手についてはA、B、Cなど記号を用いて表記している。

1. 演習の設計と意図

筆者は、本稿で実践報告の素材とする演習授業を2016年度から担当しているが、聞き取りを主要内容にしたのは2018年度からである。所属する専攻では、卒業論文の調査で聞き取りをおこなう学生も少なくない。筆者の専門は近現代の日本地域史であり、現代史研究にとって、聞き取りを含むフィールドワークは極めて重要な意味を持つことから、演習を通じて経験を積んでおく必要がある。

これまで聞き取りは年度ごとに主題を設定して実施してきた。2018年度および2019年度は、多文化共生教育の歴史の聞き取りに取り組んだ。具体的には、大阪大学文学部が位置する大阪府豊中市の公立小中学校において、1970年代から在日朝鮮人教育に取り組んだ教員の方々の話を

聞き記録にまとめた。豊中市は、障害児との共生教育、今日でいう「インクルーシブ教育」を先駆的に実践してきた地域という個性を持つが、同じ教育の場で蓄積されてきた「在日外国人」教育の実践を記録することが、現代日本社会を多面的に理解するうえで必要だと考えたからである。また、定年退職を迎えた元学校教員の方々は語ることに慣れており、学生が初めて聞き取りをする方として妥当ではないかという実際面での理由もあった。そして、2020年度も主題を変更し、引き続き地域社会で長く生きてこられた方の聞き取りに取り組むことを計画していた。

(1) コロナと大学

しかし、2020年に入ったのち徐々に新型コロナウイルスへの感染者が増加し、1月下旬には大学から公式のコロナ対応の第一報が発出され、警戒が呼びかけられる事態となった。その後、2月には卒業式の実施形態も大きく変更され、3月には公立の小中学校などが全国一斉に休校となり、4月から授業ができるかが強く懸念されるようになった。授業開始をひと月程度遅らせる大学も相次ぐなか、3月26日に大阪大学は、4月頭からの全授業のメディア授業化を決定した。それに伴いあわただしくZoomなど遠隔講義ツールの講習会が実施され、教員有志はSNSを使って情報交換を行うなどした。

大学による決定を受け、本年度に聞き取りを中心的内容とする演習を行うのは不可能だと思ったが、4月7日に大阪を含む7都府県に最初の緊急事態宣言が出されるに至り、この緊急事態の記録こそするべきだと考えるようになった。すでに海外の大学やアーカイブ・博物館・図書館では、コロナに関するオーラル・ヒストリープロジェクトが続々と立ち上げられており、オーラルヒストリーに関連する諸学会もリモートでのオーラルヒストリーのやり方についてガイドを提供しはじめていた。

開講が迫るなかシラバスを急ぎ書き換えて、「緊急事態」の声を聞く」という目的に変更した。聞き取りが実際に始まる頃には緊急事態宣言が解除され状況も若干変化したが、当時はその見込みも全くつかなかった。まさに私たちは「渦中」にあった。現代史を大学で教えていて痛感するのは、過去と現在とが少なくない学生の意識において決定的に分断されていることである。今を生きる私たち自身がひとつながりの「歴史」の一部であり、歴史的事態である現在の記録をともに作ることをめざして、シラバスにこのように記した。

「2020年度は、緊急事態宣言が出された現在が、世界史的にも大きな意味をもつ時期であることから、「いま」を生きる人びとの声を記録し、歴史的資料として冊子を作成することを課題とする。では、対面の接触が制限されるなか、私たちは何を記録するべきなのだろうか？そこから検討していきたい」

(2) 授業の内容と形式

演習の目的を変更するのに伴い、聞き取りの内容と授業形式も再検討しなければならなかった。これまで取り組んできたような、グループを作って事前学習を行ったうえで、長い人生経験を持つ方にその半生を含めて経験を聞くライフインタビュー型の聞き取りは実施が難しい。したがってプロジェクト型に切り替え、個人単位で聞ける範囲の人に短時間の聞き取りを行うこととした。

また、そのために演習はオンラインでリアルタイム形式とした（現在であれば、オンラインでもグループ学習の選択肢はあり得ると考えられる）。

当初はそもそもオンライン授業で何がどのようにできるかもわかっていなかったこともあり、またオンラインゆえのトラブルも生じたため演習は試行錯誤の連続となった。例えば、ゴールデンウィーク明けの5月8日の授業では、大学が外部からのサーバー攻撃を受けたことにより筆者自身がオンラインで参加出来なくなり、携帯電話でやりとりをしながらすすめた。また全学的にオンライン授業が本格化する中で、授業で出される課題が著増し、学生の負担感が大きくなっているという声があり、当初は課外学習として想定していた部分を授業内で行う事となった週（6月19日）もあった。オンライン授業の実施以後、各所で問題となっていた通信量の問題について本授業参加者のあいだでは問題がなかったことは演習の進行のうえで大きな助けとなった。

表 授業の概要

第1週	4月10日	ガイダンス
第2週	4月17日	語りを記録することの意味
第3週	4月24日	過去の記録を読む／オーラルヒストリーの理論
第4週	5月8日	(※)
第5週	5月15日	権利問題について
第6週	5月22日	著作権について
第7週	5月29日	実施前の打ち合わせ
第8週	6月5日	聞き取りの実施（授業外）
第9週	6月12日	書きおこしについて
第10週	6月19日	作業日
第11週	6月26日	編集作業について
第12週	7月3日	一次原稿提出
第13週	7月10日	原稿修正確認
第14週	7月17日	原稿締切
第15週	7月31日	ふりかえり

授業実施後に実際に行ったことを記載。

※外部からのサーバー攻撃があり、質問案を出すことなどに振替え。

当初シラバスに定めた内容は再確認を余儀なくされ、実際の授業の進行は、おおむね表に示したようになった。本演習の受講生は全体で29名、うち学部2回生は14名と半数程度であった。聞き手としての経験がないことはもちろん、聞き取りの成果に触れたことのない学生も少なくないため、イントロダクションでは聞き取りを活用した民俗調査の一部を読んだ。その後、聞き取りの理論に関するテキストを読み、聞き取りの意義は単に知られていない事実を明らかにすることではなく、語り手の主観性も含めて重要であることを伝えた。また、過去の危機的状況の記録（『東京大震災 別録』）を読み、そこから何が読み取れ、何が読み取れないかを考え、今、何

を記録すべきかをめぐって意見交換をした。実際は、2020年度の場合、語り手は聞き手がそれぞれ個別に探してくるため多様な人物・テーマが対象となり、一定の統一性を持った事前調査に基づく質問のセットは作成できず、本人にほぼ全てを任せるかたちになった。その後、オンライン聞き取りの練習を行ったのち、30分程度を目安にそれぞれ聞き取りを行った。

(3) 記録のための合意

授業を実施する過程でも慌ただしい変化が続き、とにかく記録に残すことを最優先したため、得られた聞き取りをじっくり解釈し、位置づけなおすには至らなかった。それは今後の作業に委ねられているが、書き起こしの保存と併せて意識したのは、聞き取られた「声」を持続的に保存することである。『日本オーラル・ヒストリー研究』15号でも「オーラルヒストリーのアーカイブ化を目指して」という特集が組まれているのだが、せっかく取り組まれた貴重な聞き取りが、適切な権利関係の処理がされていないために失われる危機にある。そこで、この授業では語り手との合意を形成するため、説明書・同意書・合意書を作成し、「声」を残せないか検討したため、その点についても紹介する。

まず説明書について述べる。これまでの演習では、授業担当教員が聞き取り協力者を探し、それぞれに事前に挨拶に行き、授業の意図を説明するなどしてきたが、2020年度の演習では、聞き手である演習参加者がそれぞれに語り手を探す形式にした。そこで、聞き取りのプロジェクトの目的と方法などを聞き手が説明するための資料として、「説明書」を作成した。これにより、語り手の理解が深まった面があるいっぽう、固すぎるとして聞き取りを断られた事例や、説明が長すぎるであるとか、将来のための記録としての性格が重視されていて今役に立つかわからないと言われたという報告が寄せられた（2021年度には詳細な説明書は廃止し、簡潔な授業への協力依頼文のみを作成することとした）。

プロジェクトの説明には課題が残るかたちとなったが、プロジェクト全体への理解を得て、第一目標である紙媒体の報告書を残せるよう努めた。改めて言うまでもなく、元になった声のデータもオラリティ（Orality）に満ちた貴重な資料である。今回の演習では大学との関わりが深くなることを想定したため、保存先として大学アーカイブを提示し、その保存と利用についても合意を得るよう図のような書面を準備した（図1）。音声・動画については保存を話者が望まない場合も少なくない。それについて、どのようにすれば語り手の納得を得られるのか、引き続き検討を加えていく予定である。調査の結果生み出された資料を預かっている筆者もいつかはなくなるのであり、資料作成者には将来のことを見据えて対策をとる責任があると思う。

研究協力者保管用 / 研究者保管用

同意書

私_____は、大阪大学文学部の授業「文化交流史演習」で実施する聞き取りプロジェクト「『緊急事態』を記録する」について、説明を受け、内容を理解したうえで、

インタビューに協力します。

音声・映像の記録に同意します。

音声記録のみに同意します。

インタビューの記録が、大阪大学アーカイブズに収蔵され、研究・教育・社会貢献事業に利用されることに同意します。継続的な保存に必要な範囲での複製がおこなわれることがあります。

ただし、

インタビューの音声・動画記録のインターネット上での公開はみとめません。

インタビューの報告書原稿のインターネット上での公開は認めません。

また、利用の際には、下記の点を求めます。

個人名が特定されないこと。

音声・映像記録の複製をしないこと。

映像記録から論文・記事等への引用をしないこと。

その他（スペースがなければ、裏面に記載ください）

インタビューの著作権を、元となる記録の所蔵者に譲渡します。

年 月 日

署名： _____

|

連絡先

図-1 本演習用に作成した同意書

コロナ禍において、大学をめぐる様々な事象が起り、また今も起り続けている。オンライン授業の評価や、帰省者・感染へのバッシング、深刻な経済的危機や、クラスターの発生など。これらの報道に触れるたびに、報道のなかでは部分的にしか取り上げられない、一人の人間としての語りの記録が必要であると思うようになった。とはいえ、語り手が多彩になると、事前準備として何が必要かも判然とせず、学術的なオーラルヒストリーの条件とされる、入念な準備をおこなうための助言が行き届かない点も少なくなかった。また、一人一人が課題を実施する形にす

ると、進行のバラツキが大きくなり、冊子編集まで授業期間内に終えることはできなかった。それでも、困難な状況のなかで聞き取りをし、文字起こしをした成果をまとめた 450 頁の冊子には、一定の資料的意義があると言える。具体的な内容については、次章で検討する。

2. 聞き取りから見えてきたこと

(1) 聞き取りの概要

本章では、演習での聞き取りについて、まず概要を説明したあと、実際の聞き取り事例を紹介したい。さらに、聞き取りを通しての演習参加者の感想を取り上げ、最後に、聞き取りの実践から見えてきたことを述べたい。

まず、聞き取りを行なった時期について見ていきたい。2020 年 5 月末から同年の 7 月上旬にかけて、受講生 29 人が合計 30 人を対象に聞き取りを行った（ほとんどの学生が 1 対 1 で聞き取りを実施している）。そのうち、6 月に行われたのが全体の 9 割以上と一番多くなっている。この聞き取りを行なった時期は、同年 3 月以降のコロナ「第一波」の感染がおさまった頃で、5 月 21 日に大阪府下の緊急事態宣言が解除された直後にあたる。また、この時期の大阪府下の新規コロナ感染者は多い日でも 20 人程度に止まっており（図 2）、聞き取りをする側も聞き取りを受ける側も、コロナがある程度おさまったという安堵感を共有していることが特徴と言えよう。なお、大阪府での感染者はその後 7 月から 8 月にかけて再び増加し、多い日には感染者が 250 人を超え、府内の病院ではコロナ専用病床の逼迫が問題となった。

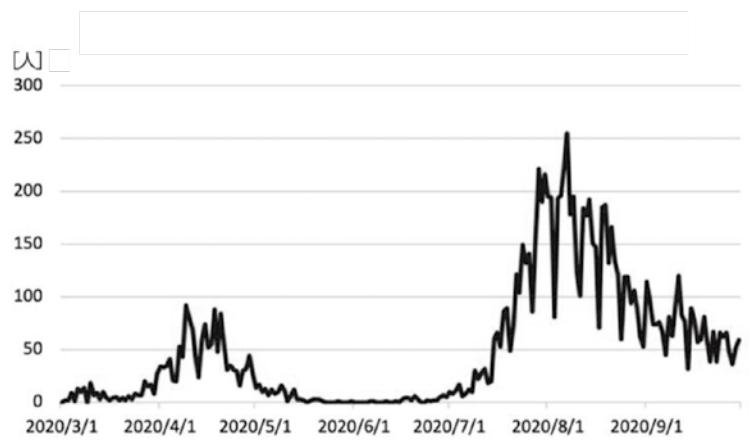


図-2 大阪府下における新規コロナ陽性者数の推移

出典：大阪府新型コロナウイルス感染症対策サイト< <https://covid19-osaka.info/> >をもとに、筆者作成

次に、聞き取り対象者の区分と聞き取りの実施形態について見ていきたい。「第一波」では、日本から海外へ留学している留学生が帰国を余儀なくされたこともあり、そのような経験をした留学生に聞き取りをしたいと考える受講生が多かった。実際、この時期に留学を経験した学生への聞き取りを行なった者が、受講生 29 人のうち 11 人と最多であった（内訳としては、海外か

ら日本に留学していた留学生が5人、日本から海外に留学していた留学生が6人である)。また、コロナの影響により、新たに聞き取り対象者を見つけ出すことが難しかったことから、受講生それぞれの友人に聞き取りを行なった者が11人(内、新入生3人、就活生1人を含む)、家族への聞き取りを行なった者が5人(母4人、父1人、弟1人で、ある受講生は母と弟に同時に聞き取りを行なっている)となった。そのほか、知人への聞き取りを行なった者が2人おり、聞き取り対象者30人のうち、半数の15人が大阪大学の学生となったが、コロナによるさまざまな限界がある中で、一定程度の幅をもった聞き取りがおこなえたといえよう。

聞き取りの実施形態については、Zoomなどを利用したオンラインでの実施が21人であり、聞き取り対象者が家族の場合など、対面で聞き取りを実施したのが8人であった。オンラインでの聞き取りはほとんどの受講生にとって今回が初めての試みであり、それぞれが方法を模索し、授業で互いの進捗を共有しながら聞き取りを進めた。

(2) 聞き取りの事例紹介

ここでは、上で見た聞き取り対象者の区分にしたがって、「留学経験者」、「友人」、「家族」への聞き取りの事例をいくつか紹介したい。まず、「留学経験者」への聞き取りを取り上げる。「留学経験者」は、海外から日本に留学していた学生と日本から海外に留学していた学生に大別できる。

前者については、出身国への帰国が困難な中、日本でのアルバイトが打ち切りになるなど金銭面で生活に不安を抱える者が多くみられた。その一方で、国境を跨ぐ移動が厳しく制限される中、日本から出身国に帰国した学生も少数であったがみられた。例えば、韓国からの留学生Aに聞き取りをしたある受講生は、「第一波」中にAの父が危篤になり一時帰国した際の様子を聞き取った。Aは韓国到着後の2週間、自宅での「自己隔離」を余儀なくされ、その間に入院先の病院で父は亡くなったという。Aは、帰国時に2週間の「自己隔離免除」となる書類の手続き方法が事前に大使館から十分に示されておらず、交渉をしたものの父のいる病院には父が亡くなるまで立ち入ることが認められなかったと語った。

一方、後者については、2020年3月ごろの留学先からの帰国時の様子を聞き取った者が多く、帰国者の受け入れ体制が十分に整っていない中での混乱や、帰国後2週間の「待機」期間の経験についての語りが多く見られた。ある受講生は、イギリスのマンチェスターに留学中であったBへの聞き取りを行い、イギリスでのコロナウイルス感染拡大に伴い、留学先からの突然の帰国を余儀なくされた混乱の様子を聞き取った。

聞 さっき、レベル2になってから、大学の方からも連絡が、帰って来なさいっていうような連絡が来たっていう風なお話やったんですけど、そのあたり、どういう人から、どういう風な連絡が来たのとか、覚えてる範囲でいいんで、教えてもらってもいいですか。

B はい、はい。連絡が来たのは[大阪大学文学部の]国際連携室から来てて、やっぱりレベル2になってるので、これ以上、レベル3になってしまうともう便が無くなってしまふ。飛行機がもう無くなってしまっって帰れなくなっちゃうから、今の内に帰って来た方がいいですよっていうメールが来てて、私、部局間[協定に基づく留学]だったんで、

文学部同士の交流だったんで、国際連携室から来たんですけど、大学間（協定に基づく留学）の方、阪大とマンチェスターとか、なんか、阪大とかの方の人には、阪大から直接にメールが来てたらしいです。私はちょっと知らなかったんですけど。だから、私には、その国際連携室からのメールと、あともしかしたら、文学部から来てたかなっていう感じなんですけど。だから、（同時期にイギリスへ留学していた）知り合いから、もしかしたら帰った方がいいんじゃないですかねみたいな、LINE が来て、あ、やっぱそうなんかーってなって、その子からいろいろ情報をもらって、文学部からは何も来ないけど、これは帰らなきゃいけないねってなって、帰った次第です。だから、ちょっと、情報的には正直言うと分かりにくかったかなっていう…

他の聞き取りにおいても、大学や日本政府からの情報発信が混乱しており、留学生同士や大学教員・職員などが個別に帰国者を支援した様子が数多く聞き取られた。

次に「友人」への聞き取りの事例について見ていきたい。友人への聞き取りとしては、受講生が2人組になり双方に聞き取りを行なったものや、新入生である大学1年生への聞き取りを行なった者が多かった。聞き取り内容としては、コロナによる学業やアルバイト、サークルなどへの影響を聞き取るものが多く、リモート授業への混乱や、新入生などでは、大学で人間関係を構築することができないことへの戸惑いや焦りが聞き取られた。

サークル活動について、ある受講生は所属する部活動の主将Cに対する聞き取りとして、コロナによる部活動の自粛や中止の中で、部のトップとして大会や新入生の勧誘に模索しながら主体的に対応していく大学生の様子を聞き取った。

聞 しかもコロナで今多いですもんね。そういう、秘密にせんなん情報。えっと、あと今、課外活動が7月1日からちょっと緩和されるかもしれないってことで、なんか（部活動の）ガイドライン作ってると思うんですけど今まさに。

C そうですね。

聞 それについて、コメントありますか？

C ガイドラインについて、まあガイドラインの、その主務の方から、意見っていうかこういうことをセミナーで聞いたっていうのを伺った時には、まあ、その、けっこう納得しました。えっと、その…。大学生って、けっこう個人的に特別な立場だと思うんですよ。えっとまあその…。大学生は、学生なんで、社会的に見て子どもっていう風にも見られるし、逆に社会人になるほんとに直前なんで、そろそろ社会人になるころの慎重な決断とか、責任感とかを求められるっていう。両方求められるっていうか、両方の扱いを受ける立場だと思うんですね。だからその、僕が幹部運営で思っていることは、僕たちは学生、あくまで学生なんで、学生だけの意見ですよ。僕らが幹部会議で決めるこ

とって。あくまで、大人たち、専門家の方とかが、コロナとかにいたってはそうですけど、慎重に考えて、決めてきたことって僕らにとっては、まあ全然その、思考が及んでいないわけです。その、だから大人たちは、僕らは三手先まで読んでるつもりでも、大人たちは五手、七手先まで読んでるので、その、僕たちにとっても、納得いかない判断のように見えても、実はそういうわけじゃない、僕たちが勝手に動くべきではないっていう時もある一方で、まあ、幹部として、部活を運営していく上で、社会的責任とかも考えなきゃいけない、まあ、コロナはちょうどいい機会だったんで。思ってたんで、ガイドラインが、その、だから、僕らが、その…、緩和されたからといって、思うがままに活動してしまったら、その社会の責任が、僕らに降りかかってくると思うんですけどそれをどう対処するかみたいなことにも、ちゃんと、大人たちが見据えてくれた上での、その紹介だと思ってるんで。まあ、その…。このガイドラインっていうのは、大学生として、子どもの立場であるっていうのを、まあ認識させられると同時に、社会人としての責任とかもいろいろいい機会になっているんじゃないかなと僕的に思っているんで、この作成自体は僕は、その…いやではないというか、むしろ、これをいい機会にしていけたらな、と思います。

「家族」への聞き取りの事例としては、受講生の母親への聞き取りが多く、コロナによる仕事や家事の変化などについての言及が多く見られた（なお、フルタイムの仕事の中では、小・中学校や高校の教員が最も多く、学校現場で急速に整備が整えられた ICT 環境への戸惑いや、感染リスクを抑えながら対面で児童・生徒たちと接することの難しさなどが語られた）。

一方、父親に聞き取りを行った事例としては、大阪府の小規模企業の社長である父 D へ聞き取りを行なった受講生の聞き取りが挙げられる。D は、コロナによる経済活動の停滞の中で、社長として迅速な決断を迫られることへのプレッシャーを語った。

- D（前略）コロナに雇っても、子供とか家族のためには、自分がもう、死んでも、仕事をやるか、それか、辞めて、坊さんになるか。どっちかしか道は、ないんですね。だから、そういう意味では、A の仕事をするか B の仕事をするか、この人に辞めてもらうか、自分の給料を減らすか。どちらにしても、どれから手をつけてええかっていうのが、災害時の医者でいう「トリアージ」やね。だから、「どれからやるか」、そして「どうやるか」。この人死にかけてるから、これやってももうあかんわ、優先順位（をつけて）、これから助けよう、新しい機械から、新製品からやろう。もしくは、例えばマスクが足らんと思うからマスクを、更に今から作るんや、とか。これも間違うかも知れへんけど、どれから手をつけるか。だから、これもトリアージになるわけ。そしたら、リストラするにしても 5 人おる中の 1 人を辞めさすんやったら、うるさいけども能力のある奴か、会社のために、辞め（させ）やすい人なのか、今は大した働きせえへんけども、長く働く（人）か。そのどれをチョイスするか。これも正解がないし、教科書（も）ないんで。だから、トリアージというか、どれからいって（＝どれかから手を付けて）何かを殺しながら、何かを立てていかなあかん。だから、「みんなうまいことやるか」てこんな綺

麗ごとは、零細企業には通用せえへんので、何かを殺して何かを生かさなしゃあない。そして、それを一つ間違うたら、全部責任（をとる人）は社長やし、リーダーやし。何をやっても、たぶん半分の人からは、責められます。「なんでこんなしたんや」て。でもこれは、永遠のテーマになるし、何をやっても後悔は、残るはずやトリアージっちゅうのはなあ。だから、我々思うのは、「5人で決めたからこうやないか」とか、政策決定で、遅くても、間違っても、「内閣で決めたから、5人で決めたから、我々が決めたので従わざるを得ん」て、こういうのは羨ましいわね。一人が責められることないもん。だから、我々零細企業からしたら、政府のやってることは、羨ましいなあとは思わね。

ここまで、具体的な聞き取りの事例について紹介してきた。次に、聞き取りを行なった受講生たちの感想を見てみたい。

(3) 受講生の感想

ここでは、聞き取り終了後の受講生の感想文から、受講生たちが聞き取りから何を感じ、また聞き取るという行為をどのように受け止めていたのかについて見ていきたい。

まず初めに、本人もコロナによる留学先からの途中帰国を余儀なくされた受講生 E の感想を取り上げる。

Fさん（筆者注：聞き取り対象者）は、聞き取りのなかで、「隔離」という言葉を使用していた。これは、欧州からの帰国者に対する、二週間の待機要請のことを表している。日本政府は、アジア各国や米国、欧州などからの帰国者への水際対策として、公共交通機関は使用しないことを条件に、自宅またはホテルでの二週間の「待機」を要請した。しかし、聞き手の私も同様に、インタビューでは「隔離」という言葉を使用し、「待機」とは言っていない。「待機」と「隔離」が同じ状況を意味するものの、話者によって使い分けられていたことがうかがえる。また、要請された「待機」という言葉を、人々は「隔離」と解釈するようになったとも考えられる。

ここでは、インタビュー後に聞き取り内容を振り返ることで、帰国後の「待機」を「隔離」という言葉で表現していたことの発見が読み取れる。政府からは「待機」という言葉で要請されていたそれを、当事者である E は当時「隔離」として捉えていたということが、同じような体験をした F へのインタビューを経ることで「発見」されたと言えるだろう。誰しもが「コロナ経験」の当事者であるからこそ、自分と似た境遇にあるものへの聞き取りを行うことで、自身の経験をも見直す契機となったようである。

次に、高校時代の同級生で東京の大学に進学したのち地元へ帰省することになった友人に聞き取りを行なった G の感想を取り上げたい。

実際に聞き取りを行った時、帰省していない私は、テレビで報道されるような、コロナウ

イルスへの感染や規制に対して恐ろしく感じて帰省した大学生をイメージすることしか出来ていなかったの、彼女に「大変な思いをされている方には申し訳ないが、私は別にそんな風には思わない。帰省して楽しい日々を送っている」と言われたときには、非常に取り乱してしまった…(中略)…この事態が過去の出来事になったとき、このような個人の体験は、その他大勢の、同じような体験をした人の経験と混ざって、どれも似たような「大変な思い」でまとめられてしまうのだろうと思う。この聞き取りを読んで、個人の思いを残すということは意外にも難しく、その残された思いは貴重なものになると感じた。

Gは友人への聞き取りを通して、コロナが収束した後の時代において、個人の「体験」の違いが捨象されて、「大変な思い」として一つにまとめられてしまうことを懸念している。また、この聞き取りを記録集としてまとめることの史的価値について評価している。

また、インタビューをするという行為自体に意義を見出した受講生もいる。Hは、感想の中で次のように述べている。

インタビューの中では、帰省のことなど、自分と重なるようなお話もありましたが、新生という立場ならではの苦勞についても、たくさん話していただきました。境遇が違えば、そこにはそれぞれの苦勞があって、私が想像もしないような大変なこともあるのだと知りました。「普通の大学生活がしたい」というIさん(筆者注：聞き取り対象者。なお、Iは当時大学1年性)の言葉は、この異常な状況にあるからこそ、また、新しい環境で頑張っているとした矢先だったからこそ、出た言葉だと思えます。私は「普通の大学生活」を知っているけれど、彼は想像でしか知らないのを思って、不思議な気持ちになりました。彼の言葉は、この理不尽に対する嘆きであり、まだ見ぬ正常へのあこがれであり、収束への願いであると思えます。インタビューを通して、この先の見えない状況の中で、自分と同じ不安や苦悩を抱えている人がいることや、自分とは違う境遇で必死に耐えている人がいることを知れたのは、私にとっても、一種の救いといえるような経験でした。

ここでHは、インタビューを通じてIの抱えている不安や苦悩を聞くことができたことに、「一種の救い」の経験を見出したという。自身もコロナで先行きが見通せないなか、人の体験を聞き取るという行為が、人との関係を繋ぎ直し、聞き手の「救済」ともなったということは、同時代的な経験を聞き取ることの大きな意義と言えるのではないだろうか。

(4) 聞き取りの実践を通して

ここでは、本章のまとめとして、コロナ禍の聞き取り実践を通して見えてきた取り組みの意義を三点にまとめてみたい。一点目は、Eの感想にもあるように、他者の経験を聞き取ることで、自身の経験のある種相対化し、自分自身の経験を見つめ直す契機となるということである。また、二点目は、Gの感想にあるように、コロナという同時代的かつ世界規模の出来事について、後世に向けて個人の視点からの歴史史料を作り出すことの重要性である。さらに、三点目は、Hが感想で「一種の救い」という言葉で表したように、聞き取り調査という場自体が、コロナによる人

の繋がりが薄れた時代において、人と人との関係を繋ぎ直すきっかけになったということである。本章の初めにも触れた通り、聞き取りを行なった時期が「第一波」直後の再拡大前の時期であったことは差し引いて考える必要があるが、本聞き取り実践の意義を、受講生ひとりひとりが自身の生活の場に引きつけて考え、模索していたことがうかがえよう。

3. 2021 年度の聞き取り演習「コロナと大学」

(1) 対面授業とグループ聞き取りの再開

上記のような 2020 年度の実践を踏まえ、2021 年度にはグループでの聞き取りを再開することとした。大阪では 2021 年 2 月に二度目の緊急事態宣言が解除されたのち、3 月には感染者が急速に増加し、いわゆる「医療崩壊」が起きた。4 月 25 日から三度目となる緊急事態宣言が出される状況下で授業をすることにとまどいも感じたが、大学の行動基準はメディア授業を推進しつつも、必要な条件を満たし、かつ申請があれば専門科目での対面授業を認めるというものであった。そこで、二年連続で対面の聞き取りをする機会を提供できないことによる問題を考慮し、リスクについて初回ガイダンスで説明し、確認したうえで対面のみの授業を実施することにした。必修の授業ではなかったことも、こうした形態が可能になった条件である。

本年度は全体のテーマを、「コロナと大学」として大学関係者に聞き取りをおこなうことにした。演習では、対面で人の話を聞くことの意義を多角的に考える機会を提供することを意識した。そのため、ライターとして活躍する杉本恭子氏にゲストスピーカーをお願いし、人の語りを文章にする営みの実態に触れ、実際に自分たちで相互インタビューに取り組んでみた。学術的なオーラルヒストリーとそれ以外の活動とが重なりあう可能性については、今後も授業構成を工夫して考察を深めていきたい。

20 数名の受講生は 5 つの班に別れ、それぞれが設定した主題について、自らアポイントメントをとり、聞き取りを実施した。その語り手を挙げると、①大学における活動基準を設定した担当者②日本から留学をしていた学生に対応した文学部教員③大学生協食堂の運営担当者④卒業式・入学式の担当者⑤「自粛」できなかった学生となる。本稿執筆時点（2021 年 6 月末）ですべての聞き取りを終え、現在は報告書の編集中である。

組織における個別業務の担当者への聞き取りの場合、年度を越えたことで担当者が変わっていたことなどから語り手が複数となり、座談会に近い形式となる例も見られたことも本年度の特徴である。文書化された記録以外にも担当者の経験を残すことができたのには大きな意義がある。もちろん、今回主題として設定できた点以外にも組織の全体でそれぞれにコロナ対応が行われていたことを考えると、残された課題は大きい。

(2) 聞くことの意味

しかし、そうした記録の意味を越えた意義も感じられた。授業に参加する学生は、全員コロナによって自分自身の大学生活に甚大な影響を受けた当事者である。それらの学生が、大学の教職員らに聞き取りを行う中で、その仕事の仕方に感銘を受けた様子が強く印象に残っている。自分たちの身に起きた出来事は、当事者だから理解できるとは限らない。大学という制度を担ったそ

れぞれの人と対面することは、学生にとっても大きな経験だったようだ。

オンライン授業の評価をめぐるっては、対面授業を実施すべきとして学生が大学を提訴する例が見られたり、準備が十分に整わないなかで全面的な対面授業の実施に批判が高まるなど、コロナ2年目の本年も大きく揺れ動く状態が続いている。政策立案の場でも学生へのアンケート調査などによって対策が議論されているようであるが、実際に大学という現場で、それぞれの当事者が相互に耳を傾け、質問を発し、また自らを語る機会こそが大事なのではなからうか。今回の場合も、聞き取りをした学生が、聞き取り後に、逆にヒアリングを受ける場面もあった。専門知に基づいた、どのような「対策」の基礎にも、問いかけと語り、そして耳を傾ける人と人との関係が必要ではないだろうか。

おわりに

2020年から21年にかけて日本オーラル・ヒストリー学会において研究活動担当理事を務めた一人として、コロナ禍の聞き取りについて、自分が取り組む以外の活動を支援することが全くできなかったことについて反省がある。パブリック・ヒストリーの担い手たちが歴史としてこのパンデミックを記録する試みを拡げる中、フェイスブックで「コロナ禍のオーラルヒストリー」グループを発足させたものの、活性化することはできなかった。

国際的に見た時に、日本のオーラルヒストリーの記録が乏しくなっている現状がある。ワクチンの普及という新たな事態を迎え、社会的な意識が変容する今も、聞き取りの重要性は低下していない。本特集での小林報告のような稀有な実践もあるが、フィールドワークの実施に大きく制約がなされた「空白」期間を、どのような形で記録するかも今後の論点となるかもしれない。

今後、コロナ禍の記録がさまざまになされるとして、その担い手は、日本オーラル・ヒストリー学会の会員だけでなく、興味・関心を共有する幅広い人びとであろう。多種多様な実践がゆるやかにつながることができたなら、この「百年に一度」の危機を生きた人びとの記録は、相互にその価値を高め合っていけるのではないだろうか。

あらためて、記録の意味を言葉にする必要を感じている。歴史研究に従事する筆者にとって、歴史資料が残ることが最優先になっていたのかもしれない。コロナ禍での聞き取りには、記録以外にどのような意味があるのだろうか。2021年になると耳にする機会が減ったが、「自粛警察」という行動がある不気味さを伴うのは、匿名での制裁の対象とされる人がどういふ人か、なぜそういう行動をとっていたのか、という個別的な文脈が一切捨象されるからではないだろうか。私たちは社会的に生きていると同時に個別性を生きているのであり、そこに含まれる意味の領域にオーラルヒストリーは迫ることができる。不安の時代だからこそ、オーラルヒストリーが必要だと呼びかけていきたい。

(やすおか けんいち, 大阪大学大学院准教授 / kyasuoka@let.osaka-u.ac.jp)

(まつなが たけまさ, 大阪大学大学院博士前期課程 / u536938h@ecs.osaka-u.ac.jp)